

日本の教育の功罪

粕江みずほ幼稚園事務長 秋元幸生

はじめに

今回の欧州視察を通して、現在の日本の教育の功罪についていろいろ考えさせられた。ここでは教育以外の社会的要素も含めて、次の6つの側面から感じたことを述べてみたい。(1)時代や国境を超えた普遍的側面としての「真の教育とは何か」。専門家による多くの教育的論議はここでなされるものだろう。(2)「国民性と社会風土」。世界は1つの時代だが、伝統、風土、血族、国家などの要素が教育に及ぼす側面は考慮する必要がある。(3)「どのような日本人をこれから輩出しようとしているか」。これは展望、哲学を持った教育がなされているかということである。(4)「時代に沿う教育」。現代を生きる我々には、二千年の文化の上にさらに新しい英知を積み重ねる義務がある。(5)「家庭と教師の役割」。(6)以上をふまえた、よりよい教育の「実現方法」。

以下それぞれの側面について述べるが、理念的な話をすると紙数の都合でまとめきれないので具体的な話を中心に述べる。

1. 「真の教育とは何か」の側面

真の教育が人間教育にあり、同時に文化の蓄積をふまえた独自性と知見を備えた人間を育成することにあるのは、多くの人は異論はないだろう。しかし日本の教育の現状をふりかえるとき、果たしてこのような点が意識的に、かつ体系的に、教育の現場に作用させられているという証しはあるだろうか。証しなど特別なくて、与えられた環境の中で個人なりに思考、苦悩、獲得していくべきものか。だとしたら教育という名の役割はあまりにも軽すぎる。みんなゲーテではないからだ。人間教育という点では、人間というものを幅広く論じ、思考する場をカリキュラムの中に持つぐらいにしても、教育として益はあっても損はしないはずだ。ただ昔の道徳のように威圧性があっては

訪問国印象記

ならないのであって、価値判断はあくまで個人に委ねられねばならない。また文化の蓄積の教育については、事実の記憶やパズルの解法に脳を酷使している児童・生徒を見ていると、言葉は悪いが将来消耗品という感じがする。「真の教育」という側面で私が強調したいこととして、“自然”という理念を教育の根底では流してもらいたいと思う。自然が営む摂理、驚異的に保たれている調和、このようなところに子供達の目が謙虚に向く教育であってほしい。ならば



パリ市街の風景

「真の教育」の半分は達成されるとも思う。なぜなら自然は人為的にはかなわない根源的な教育者であり、多くの真理はそこにあるからだ。

2. 「国民性と社会風土」の側面

日本人は独創性がないとよく言われる。真似をして改善するのが上手な国民だと言われる。これは個人的には多分にそうだと思う。その原因を国民性に帰したくない（国民性に帰すと悲観的になるからだ）。確かに日本人には抑制の美德、平均化しようとする人間力学があり、これがサイエンスにおいて負要因として働くのは間違いない。真理の探求は常識を破るところにあるからだ。また大地に立って雄大に思考するという風土が無いので、ホームランではなくヒットを集めて姑息に嫁ぐという小判蛟商法が得意なところもある。これもサイエンスにおいては負要因だ。真理の壁はヒットでは届かないところにあるからだ。しかし原因の多くは歴史的なもの、今おかれている社会風土だと思う。日本は明治以来、急速に欧米の文化を追った。この追うパターンがしみついているのだ。これを脱するのは時間の問題だろう。ただ1つ気になるのは、ネタ捜しに躍起になる姿勢から脱却できるかだ。日本人はネタ（あるいは目的）が与えられるとそこに向かう集中力はすごい。集積度を上げなければならないというLSI、コンパクトにしなければならないという電子機器、燃費を上げなければならないという自動車などは日本の独壇場だ。問題はゼロの状態から目的を探し、そこへの道程のビジョンを描ける

